

第4回富士市立東小学校における学校教育の未来を考える会（要旨）

- 1 開催日時 令和6年2月14日（水）午後6時30分～午後8時15分
- 2 開催場所 富士市立東小学校 図書室
- 3 発言要旨 ※参加者の発言は、1回のやりとりにつき1段落で、要旨としてまとめています。

【凡例】「・」…参加者の発言 「⇒」…事務局の回答や発言

開会

<事務局から>

- ⇒「須津中学校区（東小・須津小）の児童数推定について」の説明
- ⇒「これまでいただいた浮島地区の方からのご意見」の説明
- ⇒「令和6年度からの小中一貫教育について」の説明

【事務局提案】

⇒「富士市立小中連携・一貫教育基本方針」にあるように、今後須津中学校区のいずれかの学校で校舎改築時期が近づいた場合、小中一貫教育を推進するために、東小・須津小・須津中の3校を、施設一体型小中一貫校にしてはどうかとの話が持ち上がったら、どのように考えるか。

【質疑応答】※発言主旨ごとに質疑応答をまとめています。

- ・現在、路線バスは船津から根古屋までは運行していない。今後、利用者がさらに減れば、船津からの便も減便されてしまうだろう。そうすると、小学生が歩いて通うことになり、事故に遭う危険性も高い。

⇒通学時の子供の安全面は最優先に考えなければならない。旧大淵第二小学校の児童については、スクールタクシーを手配している。また、元吉原小学校については、通学の時間帯に合わせ、路線バスを増便する支援をしている。通学において遠距離になる場合や危険が伴う場合には、子供たちが安全に通える方法を検討する必要がある。

- ・参考資料として「隣接校選択制度のてびき」が資料として配布されているが、これは沼津市が採用している制度で、参考として用意した。申請条件として「指定校よりも隣接校の方が直線距離で近い」かつ、「隣接校まで直線距離が小学校で2km以内、中学校で2.5km以内」の条件がある。富士市の「富士市立小中連携・一貫教育基本方針」だと、適正距離は4km以内となっているが、小学校低学年が大きな荷物を持って4kmを通学するというのがナンセ

ンスである。この制度を採用すれば、岳南江尾駅周辺の方は、東小学校の方が直線距離で近いので、通学の利便性を考え、東小学校を選択したいという方もいるのではないかと。

⇒江尾地区の就学期の児童の数が東小を選択すれば、一時的に複式学級の発生が免れることができるかもしれないが、今後、須津小の児童も減っていくことも問題である。小中一貫校の開設までは、校舎の基本設計から教育内容の検討を含め、開校まで4～5年はかかる。今いる子供たちのことも大事だが、これから入学する子供たちやこれから生まれてくる子供たちの教育のことも考えなければならない。

- ・小中一貫校に現存する校舎を活用するとなると、中学校の場所とってしまうが、もし新しく建設するのであれば、増川や神谷、江尾などに建ててくれると、浮島地区として賛同が得られやすいと思う。
- ・小中一貫教育を進めていった方がよいと思うが、距離の問題もあるので、場所については、できる限りみんなが均等に通える場所を検討していただきたい。また、根方街道沿いよりも、沼津線沿いの方が安全で通いやすいと思う。
- ・浮島地区の沼津線南側は、歩道がない部分がある。須津地区のように南側にも歩道を整備していただきたい。
- ・通学区のエリア全体から通うということを考え、一貫校を建てるに当たっては、どこがベストかということを考えてほしい。

⇒現在、通学路の設定について小学校は、根方街道は通学路としては設定していないと聞いている。中学校は通学路の設定はないものの、根方街道を登下校時の道として利用しないよう指導している。

- ・小中一貫ビジョンの「目指す児童生徒像」に「予測困難な時代」とあるが、子供たちにはある程度予測をしてあげないと難しいのではないかと。

⇒東小学校と須津小学校、須津中学校の3校で、令和6年度には「読解力」、「自己調整力」、「人間関係形成力」の3つの力を重点的に育成していくことを共有している。「目指す児童生徒像」に込められた願いは、東小学校グランドデザインに詳しく記載しているが、小中一貫ビジョンの「目指す児童生徒像」の部分には、スペースの関係で全てを載せることができなかった。ご容赦いただきたい。

- ・これから就学する子供たちのことを考えなければならないことは理解できる。しかし、その手前の段階で、複式学級になってしまうのだから、その打開策として江尾の子供たちが少しでも東小に来てくれる可能性があるのならば、検討してほしい。須津小学校がそれによって複式になってしまうのであれば問題だが、そのようなことはないのだから、まず直近の課題の解決策になるのではないかと。

⇒教育委員会として、市内全域の子供たちが豊かな教育を受けられるような施策を考えなければならない。この制度を採用すると、子ども会や学区制のことなど、市内全域で諸問題

が出てくる可能性がある。現段階においては正式な回答ができないが、何かしらのゴールがあれば、その期間限定であれば複式解消などの施策が取れるかもしれない。

- ・児童数が減っていき、複式になるというゴールは見えている。この地域だけが減るのではなく、市内全域で減っていくのだから、市全域の施策として考えてもよいのではないか。

⇒児童数減少という課題に対して教育委員会が考えている施策が、今回提案させていただいた小中一貫教育と小中一貫校という施策である。松野学園では先行して、小中一貫校として小中一貫教育がスタートしているが、中学生は小学生に対し優しく接し、小学生は中学生に憧れてという関係が自然と生まれ、小中一貫校ならではの姿が見られる。中一ギャップもほとんどないと伺っている。

- ・知り合いのお子さんが中学1年と小学1年で松野学園に通っているが、教育環境がとてもいいと聞いた。「お姉ちゃんと一緒に学校に行ける」というのが、妹にとって心強いらしい。校内でも小中学生が一緒にいるというのがすばらしい。

- ・松野学園は、小中が1対1の関係であるから成功しているように思う。須津中校区は2つの地区が一つになるという地域である。子供会活動やPTA活動においては少しずつ活動が停滞しているようだが、基本的に学校区は地区別、町内別になっている。浮島地区は現在単独の地区として独立しているが、小中一貫教育を進めることで、この関係性が崩れてしまわないか。

⇒学校が一つになることによって、町内や地区まで一つにしていくようなことは、市として考えていない。

- ・地区の再編までであるのであれば、松野のようにスムーズにいくかもしれないが、須津地区とは、地区組織や連合町内会も別々で考え方も違う。十数年前に、江尾は浮島地区に編入したらどうかと町内に申し入れをしたことがあったが、「浮島地区には入りたくない」という返事もらった。地区や町内を越えてというのはなかなか難しいだろう。

⇒松野学園は、旧校舎の耐久度測定の結果数値がかなり低かった。小中が1校ずつである上に、場所も隣であったことから小中一貫校の話が進んでいったが、学校運営協議会のメンバーを中心に開設準備委員会を何度も開催して準備を進めた。もし、須津中校区で小中一貫校という話になっていくのであれば、東小や須津小、須津中も含め、須津地区と浮島地区の二つの地区で何度も話していく必要がある。地区がまたがるので、松野地区以上に検討期間も開催回数も必要となるだろう。

- ・小中一貫校の案が出てから、松野地区ではどのくらいの期間がかかったのか。

⇒校舎建設は、基本構想—基本設計—基礎工事—校舎建築と進むので建設決定から4年程度かかる。また、古い校舎を壊す作業も含めると、プラス1年で5年かかることになる。そ

れと並行して、どのような学校にしていくかという地区の方々と話合いも進めていった。

- ・同一地区、隣同士の学校であっても、それだけ時間がかかったのだから、それを2つの地区、3つの学校でやろうとすれば、相当な期間と検討が必要だろう。

⇒松野は、地理的な条件や学校環境の条件などかなり条件がそろっていた。須津中学校区で行うとなれば、3つの学校運営協議会で話していくことになる。もちろん、須津中、須津小、東小を一つの校舎にしようということを経済的に共有した上でというのが前提である。校舎内の教室配置や制服、校歌、名称など一つ一つ協議、確認していった。

- ・このエリアで小中一貫校をやろうとすると、建替案では意見がまとまらず、どこかに新設をするという案がでるだろう。そうすると、跡地利用をどうするのかということも考えなければならず、相当な期間がかかる。その間に児童数が減ってしまうことが心配である。

⇒児童数はもちろんだが、施設がどこまで使えるか、建て替えの時期も近づいていくということもまた考えなければならない。

- ・須津中校区で一番古いのはどの学校か。

⇒一番古いのは、須津小で南校舎が築58年である。築50年の時に実施する耐力度調査の数値によるが、概ね築65～80年で建て替えの時期を迎える。

- ・須津小の耐力度の数値はどうだったか。

⇒それほど悪くもなく、よくもなく平均的であった。東小学校は、まだ築44年で50年を迎えていないため、調査未実施である。

- ・須津小の校舎の築年数を考えて、今回の施設一体型小中一貫校の話ということか。

⇒校舎のこともあるが、小中一貫教育を推進するため、教育環境の充実を図りたいというのが一番のねらいである。当面の間、小中一貫教育は施設分離で進めていくが、施設が一体型であれば、教科担任制の導入や行事を通じた異学年交流などできることも多くなる。また、小中の学校籍に限らず、全教職員が全校の子供たちを見ていくので、小学校の時の姿や成長の過程も見取ることができる点においても教育的な効果が高いと考える。

- ・先ほどの話から小中一貫校が現実的になるには年数がかかるので、小中一貫教育を進めるためにソフト、ハードそれぞれに考えていくことの方が現実的である。隣接校選択制度は子供や保護者の考えが反映できる制度なので、東小学校のことを考えると導入したほうがよい。

- ・他の地区の方でも、学区によっては指定校よりも近い学校があると聞く。長期的には小中一貫校の開設も考えていかなければならないと思うが、それまでの間の施策としてぜひ検討してほしい。

- ・せっかく、隣の市で隣接校選択制度をやっているのだから、富士市でやれない理由を逆に教えてほしい。

- ・東海大学沼津校舎があったとき、周辺でアパートなどの住環境が整い、人がある程度集まるような動きがあった。しかし、東海大学が閉じたことで、また人が分散しはじめたので、隣接校選択制度が生まれたのではないか。
- ・近隣の状況によって人の動きが変わる。人流は読めないが、こうした動きに合わせ、先を見据えた施策が必要だと思う。
⇒隣接校選択制度を導入した理由は定かではないが、距離の指定があとから導入されたと伺っている。

- ・子供たちが安全に通えるようにするために、近場の学校に通えるようにすることも考えてほしい。
- ・子供たちが安全に学校に通えて、たくましく優しい人が育つまちづくりを進めてほしい。
- ・若い人たちが少なくなれば、地区の祭りもできなくなってしまう。

<事務局より>

- ①今回のここでの発言要旨をWEBに公開していくこと。
 - ②次年度、継続して開催していくこと。
- 以上2点を確認して閉会。